3月2日掲載

昨年4月、開校したばかりの立教セカンドステージ大学に入学しました。3月にそれまで勤務していた学校を定年退職し、これから自分のための時間が広がるという楽しみにウキウキしていました。

心弾む、楽しい一年間でしたが、とりわけ一番の収穫は、出会いの素晴らしさに気付くことができたことです。

たくさんの学友たちとの友情は、格別のものでした。それぞれの方がその人生を力強く生きてきて、ここに集ったのです。珠玉のような出会いでした。日本各地を巡って商売の販路を広げてきた方、海外生活や単身赴任の長かった方、また、ご家庭を守りながら家族の中で自分の世界を広げてきた方、女性としての仕事の場を切り開いてきた方等々、さまざまな方がさまざまな場で、わたしと同じ時代を生きていらっしゃったということが感じられ、毎日毎日が発見でした。

講義を通しての先生方や、新しい考え方との出会い。授業の中で降るように投げかけられる、資料や知識や論理。教員という多忙な職業の中で枯れかけていた心に、潤いが戻ってきたような気がしました。よく分からないような難解な論理さえ、面白いと感じる好奇心を取り戻しました。中でも第一回目のゼミで、笠原清志先生のおっしゃった「教養とは、自分の中にもう一人の自分を見つめる自分を持つということです」という言葉は、わたしの中に強烈な印象を残しています。

「現代史の中の自分史」では、立花隆先生のご指導のもと、毎週毎週自分史を書きました。大変でしたが、それを通し今まで考えてきたことや行ってきたことが文章になり、生きてきたことの意味を考えられるようになった気がします。最後の修了報告書では、「心の再生」というテーマで自分を見つめることに挑戦しました。もう一度、自分という存在に出会うことができました。

こんな出会いができたことの素晴らしさ、わたしを取り巻く大きなものの力に感謝せずにはいられません。これからは、この出会いをほかの場所やほかの人に広げていきたいと考えています。わたしの過去の経験では、悩みやトラブルを抱えた子どもやその親御さんがたくさんいました。小さなことでも誰かに聞いてもらいたいというとき、その誰かになれればいいなと思います。
「聖書と私」の講義の中で、「主の祈りの句読点は、ちょっとの休み、一分の沈黙」と聞きました。わたしにとってこのセカンドステージ大学での一年は、まさしく主の祈りの句読点の時でありました。

今後は、昨年までの教育現場で見た、自分を好きになれずに自己肯定感を持てない子どもたちの支援の仕方を身に付けたいと思っています。どのように聴き、どう勇気づけをしていくかのノウハウを学びたいので、カウンセリングを学ぶワークショップに参加するつもりです。

子育て談議や家庭学習の相手をしながら、草の根相談が広がればいいなと夢見ているのです。

大塚 眞理子（おおつか・まりこ）
立教セカンドステージ大学 1期生

1947生まれ。小学校教諭。今まで埼玉県内の小学校を6校勤務。結婚、育児休業を取って2人の息子を出産。保育園と実母の助けで仕事を続けた。2006年より埼玉カウンセリング研究会会員。